

こども科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）

総合研究報告書

低年齢児保育が子どもの発達等に及ぼす効果・影響の解明のための研究

令和6年度 分担研究報告書

「保育施設の管理職が考える低年齢児保育の質」

研究代表者 箕輪潤子 武蔵野大学・教授

研究要旨

本研究の目的は、低年齢児保育を行う園の管理職（園長・副園長等）が、保育の質をどのようなものとして捉え、保育を行う上で何を大切に考えているのかを明らかにすることである。保育施設の管理職に対し、3歳未満児保育について半構造化インタビューを実施した。その結果、低年齢児保育を実施している園の管理職は、「愛着の形成」「個の尊重」「心地よく過ごすための環境」「生活・経験・発達を支える」「発達・保育の知識」「子どもの理解」「集団としての保育」「保育者同士の連携」「保護者との連携」等を大切に考えていることが明らかになった。

A. 研究目的

乳幼児期に質の高い保育を経験することが発達等に良い影響を与えていると言われている（OECD, 2001, 2006, 2010 など）。特に、保育の質は多様な要素から成るが、子どもに最も直接的にかかわるのが「保育プロセスの質」（OECD, 2006）である。「保育プロセスの質」においては、保育者と子ども、子ども同士、保育者同士の関係性などが含まれている。具体的には、子どもたちの育ちをもたらし、安心感や教育的意図等を含み込む、保育者や子どもたちの関係性などが挙げられる。野澤ら（2023）は、子どもにとって保育者が安全基地となることが、子どもの発達を支え促す可能性があることを明らかにしている。

そして、日本の保育者の保育の特徴として、子どもと丁寧に関わることや、個性を把握することを理想としていること（日本総研, 2022）や、子どもの目線に合わせることを重視していること（OECD, 2019）が明らかになっている。

園により保育の環境や方法、考え方などは多様であると考えられるが、そういった点を超えて、低年齢児保育の質の要素とは何かを探索することが必要であると考えられる。そこで、本研究の目的は、低年齢児保育を行う園の管理職（園長・副園長等）が、保育の質をどのようなものとして捉え、保育を行う上で何を大切だと考えているのかについてインタビュー調査を行い、低年齢児保育の質を構成する要素について考察する。

B. 研究方法

2025年2～3月に、低年齢児保育を行う保育施設の施設長8名に対し、オンライン（Zoom）または対面による個別での半構造化インタビューを実施した。質問内容は「低年齢児の保育の質についてどのように考えていますか」「低年齢児の保育で大切にしていることはどのようなことですか」である。録音されたデータはテキスト記録に書き起こし、SCATの質的データ分析法を用

いて分析した（大谷 2019）。

＜倫理的配慮＞

研究目的と内容について、同意を得た場合のみ協力を得た。また、武蔵野大学教育学部倫理審査委員会にて承認を得ている（承認番号 R6-02）

C. 研究結果

8人の参加者とのインタビューから得られたデータを SCAT 分析手法に従って検討した結果、232 セグメント（平均 29、最小 19、最大 58）、36 コード、11 カテゴリーが得られた。各カテゴリーについて、ストーリーラインを導き出した。以下、カテゴリごとのストーリーラインと管理職の語りの例を示す。

1) 【愛着の形成】

保育者が子どもの生理的欲求を「受容」することで、子どもが「安心・安全・安定」を感じることによって、保育士との間で「愛着の形成」がされることについて語られていた。
A：自分の生理的欲求を「ワーン」と出している時に、それはもう本当に全て受容してあげたい。

B：人との関わりをベースにしてちゃんと緩やかな担当をしてということになるのではないかと思う。

E：子どもの様子に気づいて関わるのが、特に養護の面では大切で、質に関わる。

D：安心と安定がベースになる。安定して過ごすことによって、子どもが安心して、落ち着いて過ごすし、保護者の方たちも、安心して子どもを託せる。

E：母親や父親以外に愛着がもてるような相手がいること

H：保育士との愛着関係がしっかり結ばれることが大切

2) 【心地よく過ごすための環境】

子どもが家庭以外でくつろいで過ごせるように、「安心して遊べる環境の構成」を行うことや、複数の子どもがいる中でも「静

かに過ごせる環境の構成」を行うことについて語られていた。

A：家のリビングみたいに子どもがいつも安心して遊べる環境を整える

C：保育者と子どもが静かに過ごせる場の工夫をする

3) 【子どもを個人として尊重する】

子どもに対して「人格の尊重」をして「人として愛する」ことが重要。また、複数の子どもがいるなかでも、「個々の生理的なリズムを踏まえた援助」「個々の発達に応じた援助」を行ったり、「意思の尊重」「子どもが遊びを決められる環境構成」をしたりすることが大切であることが語られていた。そして、自我が始める時期には、子どもの思いを大切にしつつも、子どもにしてほしくないことについては「子どもの思いと保育者の思いの折り合い」をつける必要があることについても語られていた。

A：安心して自分自身でいられる力を獲得できるようにする

B：人として相対すること、人として愛すること

D：生理的な欲求が個々に応じて満たされる

D：個々の発達のペースや、個々の生活リズムを尊重する

B：子どもがどうしたいのかをちゃんと見てあげるとか聞いてあげる

F：子どもたちの意思を尊重する

E：子どもの時間や興味に合わせて保育者が寄り添う

A：子どもの思いを受け止めながらも、してほしくないことを子どもがしている時には、お互いに折り合いをつけていかなくちゃいけない

4) 【生活・経験・発達を支える】

「発達に沿った環境の構成と援助」「基本的生活習慣の確立」「感覚・身体・運動の発達を促す環境の構成・援助」「言葉の発達への援助」など、子どもの発達や基本的生活習慣

の確立を支えることについて語られていた。また、〔興味関心を支える〕〔自然に触れる経験〕についての語りや、2歳児では受容するだけでなく〔遊びに誘う〕ことや、子ども同士で〔群れて遊ぶ〕ことも大切であることが語られていた。

G: 体を作る要素を意識しながら、遊びを設定している

G: 1歳児はだだこねをしっかりしてほしい。

C: できるだけ言葉を端折らない、また、イメージできるような言葉を多く使う。

A: 四季折々のいろんな体験を子どもたちと共に楽しむこと

D: 2歳後半には、友達との関係が主流になっていくことを大事にしていきたい

A: 2歳ぐらいになると、例えば保育者側からさりげなく遊んでみたいと思えるようなことを誘うことも大事

5) 【発達と保育に関する知識】

子どものことを理解し保育を行う上で〔発達の知識〕や〔保健・衛生・生理的なことの知識〕が必要であることについて語られていた。

D: 運動、知的なこと、言葉の発達、発達に伴って起こる危険とか、体調、生理的な成長、体温調節機能とか、皮膚のこととか、感染症のこととか、そういった知識があるのとないのでは違う。

6) 【子どもの理解】

個々の子どもの発達差が大きいからこそ、援助をする上で子どもの〔発達の理解〕や〔子どもの姿の読み取り・解釈〕を行った上で判断することについて語られていた。

G: 発達段階を保育士がしっかりと意識して、今こういう発達だから、このように援助しようかと判断する

D: 1歳児では食事でも偏りが出てくるという時期になるけれども、そのことをどのように意味付けるかが大事。

E: 同じように見える日々の生活とか遊びの

中から、子供の成長を読み取ることができてそれに合った援助ができること

7) 【集団としての保育のあり方】

乳児は一人一人とのかかわりが大切だと言われているが、複数の子どもや保育士がいるからこそ〔集団で保育をする意義〕を考えることの大切さが語られていた。

E: 集団保育の良さとかチームで保育することの、子どもにとっての良さを見出せるといい。

C: わいわいガチャガチャもすごく大事な刺激。

D: 一人一人育ってきた子が2人になり、3人になり、それがつながっていくことで、やがては集団と呼ばれるようになる。個も尊重するし、でも、集団の生活もある。

8) 【保育の計画】

子どもの発達を踏まえて、どのような環境を構成する必要があるのかなど、〔筋道がわかる計画〕を立てることについて語られていた。

A: 人的環境、物的環境がわかるように筋道立てて抑えておく

9) 【同僚との連携・協力】

〔先輩の保育から学ぶ〕ことでよい保育ができるようになることや、保育者間で〔子どもの発達について理解を共有〕をしておくことが重要であることが語られていた。チームで保育をするからこそ、子どもに対する関わり方などでもややもやしたりすれ違ったりすることも起きやすいことから、〔保育の考え方の相互理解〕をするために話し合うことについて語られていた。

A: いい保育をしてる先輩と組んだ保育者は、それをまねて次の年に本当にそのカラーを出して素敵な保育ができるようになる

B: 自分の考えを丁寧に伝えることが必要

E: みんながもやもやしてることをテーマにして、対話みたいなことができることが大事

10)【保護者との連携・協力】

家庭環境により子どもの育ちが大きく異なることから、〔家庭での子どもの過ごし方の理解〕をすることや、子育てについて保護者がどのように考えているのかという〔保護者の背景の理解〕が重要であることが語られていた。また、保護者が子育てで悩むことが多いため〔子どもの発達の説明〕をすることや、保護者が孤立して子育てすることにならないよう〔保護者間をつなぐ〕ことが大切であると語られていた。

C：妊娠期間中にお母さんがどういう感じで過ごされたのかと、生まれた後お母さんがどんなふうに感じて、このお子さんとどのように過ごされてきたのかを質問している

C：保護者がどういうお考えなのかとか、どの程度知識を持っていच्छやるのかを理解する

D：子ども同士の関わりも付いていく中では、同じように自我の捉え方や意味付けというのが保育者間でも大事ですし、保護者支援の中でも大事になってくる

D：0歳児のときに保護者を孤立化させない。

D. 考察

低年齢児保育を行う施設の管理職は、以下のことを保育において重視していることが明らかになった。まず、安心・安全な環境において、個人の生理的なリズムに則して欲求が満たされたり、保育者とかかわったりすることを通して、保育者との愛着関係が結ばれることが、子どもを個として尊重するという子どもの権利、人権との関連で語られていた。次に、発達に沿って経験を積み上げることと、基本的生活習慣の確立のための環境構成と援助が保育者の専門性であると考えられていた。そして、その専門性を発揮するためには、発達や保健・衛生・生理的な知識の獲得が必要であることと、子どもの姿を読み取り解釈することが重要であることが指摘されている。それから、チームで保育を行う上で、

子どもの発達に沿った環境の見通しとなる保育の計画を作成すること、子どもの発達の解釈や援助方法について話し合うことの必要性についても述べられていた。さらに、子どもの家庭での様子や保護者の子育てについての考え方を把握すること、子どもの発達について保護者に説明することなど、保護者との連携が重要であることが語られていた。

これらのことから、特に保育者が子どもの姿からその生理的な欲求や思いを読み取った上での応答的で、安心感を子どもが感じられる保育を重視しており、それがベースとなって諸側面の発達を支える環境を構成していくこと、いわゆる指針の「養護と教育の一体的展開」が意識されていると同時に、保育の場であるからこそその保育士や他児との関係についても発達に応じて意識されていることがわかる。

E. 結論

本研究の意義は、低年齢児保育の質の要素をインタビュー調査から抽出したことにある。本研究の結果を尺度開発に生かす。

F. 引用文献

- 野澤祥子・滝口圭子・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美（2023a）1歳児クラスの子どもと保育者の関係性と発達との関連：「保育の質と子どもの発達に関する縦断研究」から．日本発達心理学会第34回大会
- OECD 2006 *Starting Strong II：Early Childhood Education and Care*. OECD Publishing: Paris. (邦訳：)
- OECD 2012 *Starting Strong III：A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care*. OECD Publishing: Paris. (邦訳：)
- OECD 2018 *Engaging Young Children: Lessons from Research about Quality in Early Childhood Education and Care*. Starting Strong, OECD Publishing: Paris.

OECD 2020a Literature review on early childhood education and care for children under the age of 3: OECD Education Working Paper No. 243, OECD Publishing: Paris.

日本総研（2022）保育の質に関する アンケート結果報告書（保育者調査）

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

Junko Minowa, Hiroko Inokuma (2024)
What do Japanese daycare directors think about the quality of care for infant and toddler? Poster presentation
B28, 32nd EECERA ANNUAL CONFERENCE.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし